

## 四先生の退任記念号に寄せて

経営学部長

石 積 勝

経営学部が平塚に開設され十年が経過した。神奈川大学にただ単にもうふたつ新しい学部をつくるという単純な規模拡大の発想ではなく、新学部開設を突破口に大学全体に新風を巻き起こすという狙いがあったはずであるが、その試みも大きな区切りをむかえたわけである。この間、経営学部では不十分な点は多々あるとはいえ、多くの先生方の献身的な協力のもと果敢に新たな挑戦を行なってきた。特に教室内外を問わず、いかにしたら学生教育を充実させることができるかについては、開設以来さかんに議論し、具体策も実施してきた。当然ながらその実行にあたっては各教員には通常の大学教員に求められる以上の精神的・時間的負担を引き受けてもらってきたわけである。

そうした条件下において、多くの教員は寸暇を惜しんで教育活動の基礎ともなる個々の研究に励んでいる。そして数多くの、また内容の濃い研究成果をあげている。紀要はその一端を示している。掲載された論文テーマは経営学関連のテーマを越えて多岐にわたるが、これはわが学部の特色をそのまま示している。わが学部は国際経営学科一学科で構成されており、同時に平塚キャンパス全体のいわゆる教養科目のほとんどを担っている関係から、経営学プロパーの教員以外に多くの教員を擁しているのである。いわば経営学部+国際学部+教養学部であり、その規模縮小版である。もちろん単なる規模縮小版ではなくその統合を目指している。我々はこうした新しい形の経営学教育、新しい形の経営学研究の可能性を信じ、相互に補完し、刺激しあう研究活動を継続的に行なっていきたいと念じているのである。そうした狙い

をこの紀要においてもかいま見ていただければ幸いである。

さて、本号は本学部の開設後間もない重要な時期を含め長年にわたり学部に携わり、我々の良き先輩格でもあられた四名の先生方の退任記念号である。四名の先生方はいずれも学生教育の先頭に立ち、研究活動の中心として学部を牽引してこられた方々である。わが学部の教員構成の特色をまことによく反映し、それぞれかなり異なるバックグラウンドをお持ちである。わが学部の当初の狙いを明確に反映した、いわば教員構成のプロトタイプ・原型と言って差し支えなからう。

中山茂先生についてはその学問業績、その言論活動で以前から広く名声を博しておられたわけであるが、特にパラダイムというタームと概念の紹介者として余りに有名であられる。実は私自身は『科学革命の構造』の一読者として二十数年まえの学生時代すでにお世話になっている。当時政治学を学んでいた私達にとっても必読書であった。先生が発表された学問論、大学論にも大いに啓発されたことを記憶しているが、まさか先生のような日本を代表する知性と平塚で一緒にできるとは考えもしなかった。先生のような知性が経営学部専任教員として設立当初から参加されたことひとつをとっても、いかに我々が目指した経営学部が既存のそれを越えたものであったかをご理解頂けるのではなからうか。

野間一正先生は東京外語大学で長らくスペイン語、スペイン事情等を教授され、経営学部開設後まもなく着任された。先生の教育にかける情熱、誠意には誠に頭の下がる思いである。前任校とはまったく異なった環境の下で、第二外国語としてのスペイン語履修という枠組みの中で、どのように学生諸君を動機付けし、どのように習得させるかに全力を傾けられてきた。平塚キャンパスの学生のために新たに二冊の教科書を編纂されたのである。先生ご自身がおっしゃるように、まさに「新しいぶどう酒（経営学部のフレッシュな諸君）は新しい革袋に」を实践されたわけである。テイラーメイドの二冊

の教科書はそのまま我々の財産として先生から引き継ぐことになるが、なによりも先生の教育者としての誠実を我々は心にとどめたい。

水谷雅一先生は長年の経営実務に裏打ちされた独自の研究業績を携えて我々の学部にはやはり開設後まもなく参加された。実務の第一線での経験談をちりばめた先生の講義はまさしく経営学部学生にとってなにものにも代え難いものであり、先生のゼミもまた常に希望者殺到であった。最近では経営体における倫理の問題に取り組んでおられ、その体系化、理論化を目指しわが国の経営学関係者の間で大きな注目を集めることとなった「日本経営倫理学会」を自ら旗揚げされ、現在学会長をつとめられておられる。経営倫理の問題は今後の経営実務あるいは経営学の中できわめて重要なテーマになることは明らかであり、この分野でのパイオニア的業績を積み上げられている先生の貢献は多大である。

七田基弘先生は長らく文部官僚としてわが国の高等教育全般にかかわってこられた。およそ官僚臭を感じさせない開放的なコミュニケーターでいらして、学生にも、我々後輩教員にも常に率直な対応をして下さり、我が学部のご意見番的存在でもあられた。その卓越したバランス感覚とお人柄ゆえ常に学部運営の中心で我々のまとめ役をはたして下さった。経営学部全教員の研究上の核である国際経営研究所の所長を長年お願いし、歴代の学部長とともに学部という車の両輪の一方を担ってこられた。中国復旦大学との共同研究をはじめ、いくつかの重要な共同研究には所長自らリーダーをかってでられ、そうした成功裏に終わったプロジェクトを強力に推進されるなどその貢献は計り知れない。

退職される上記四名の先生方の研究その他における蓄積を、残される我々が十分に吸収してきたかと問われると、実はまことに心許ない。いざ退職されるとなるとあれもお願いしたかった、これもお聞きしておきたかったと悔やまれることが多い。とくに戦後システムの問題点があらゆる場面で露呈さ

れつつある現代日本において、次の時代のビジョンを示しきれずにいる我々に対して、もっと活を入れてもらいたかったし、ヒントもいただきたかった。今日ほど知識人のはしくれにいる我々の自覚と気概が必要なときはないように思われるが、右肩上がりの比較的平坦な戦後状況の中で、我々もまた、時代と正面から向い合い主体を厳しく問われることなく、たこ壺型専門家集団に傾斜してきたのではないだろうか。戦争の前と後を生き、時代の激流に身を置きながら時代と格闘されてきた今回退任される四名の先生方に代表される世代の知識人から見たとき、後に続く我々は実に存在感の薄い、頼りない後輩なのではなかろうか。本当に次の世紀を切り拓く研究と教育を託すことができるのだろうかと思われていたとしても不思議ではない。

とはいえ我々にその準備が十分にあるか否かに拘らず時代は進む。その担い手も替わる。残される我々は持てる力と想像力を懸命に駆使し、先輩達の残してくれたものの上に、ひとつふたつと積み上げてゆくほかはない。そのことを一人ひとり自分の中で再確認することだけはお約束し、同時に先生方の長年にわたる学部への貢献にもう一度感謝申し上げ、本記念号の巻頭言としたい。